



その美しさは、昔女王たちを魅了し、今も訪れる人々をとりこにしています。しかしドノステリアはもう、感嘆を表す形容詞は卒業しました。これからは、将来に目を向けた、バランスのとれた文化的な街でありたいと願っています。

ドノステリア サンセバスチャン



「開かれた街、純粹に考えられた街。この街は、努力でできた、ひとえに人間らしい街。常に壁のないことを、すべてを受け入れることを願っていた。だからこそ詮無いの、美しさ。」詩人ガブリエル・セラヤは、ドノステリア-サンセバスチャンについてこう綴っています。その美しさゆえに誰をも魅了するこの街は、王室の避暑地であり貴族の集うところであった昔を懐かしむのではなく、自身のプロジェクト、歩行者用空間、素晴らしい文化活動によって、「ひとえに人間らしい街」として生き続けていくことを模索する街なのです。

美しいエアソ(サンセバスチャン)、大西洋の真珠、類い稀な環境…。この街に対する賞賛の表現は、19世紀から人を引き付ける強い力を及ぼし、ときには陳腐な表現になって聞こえたり、ときには単なるきどった言い方になったりもします。それにもかかわらず、始めてドノステリア-サンセバスチャンを訪れた人々は、街の魅力に酔い、そして世界でも美しい街の一つに間違いないという感を強くするのです。

ドノステリアに住む人も外から来た人も、落ち着いたエレガントな街並に囲まれた海の大きな一片とでもいえるコンチャ湾を眺めるのに、飽きることはありません。ラコンチャとオンダレタの散歩道では、建物と灯りの組合せ、浜辺の穏やかなトーン、海の反射、湾を囲む三つの丘の植物が目を楽しませてくれます。三つの丘とは、まず旧市街上に見える、モタ城と頂上にサグラドコラソン像が建っているウルグル山。西側のイゲルド山。そして船で渡ることができる湾の真中にあるサンタクララ島です。

これらの二つの山に、グロス地区にあるウリア山を加えなければなりません。ドノステリアの景色を眺めるのに、理想的な展望スポットです。ウルグル山は、長い間軍事目的で利用された自然要塞でした。現在は、旧市街からすぐ足を伸ばせる市の公園になっています。イゲルド山は、そこからの美しい景色と遊園地で有名です。またケーブルカーが利用できます。

この魅力あふれる街は比較的新しく、その始まりは、小さな二つの場所からでした。一つは、現在旧市街である城壁で囲まれた町の横に位置する漁港、そしてもう一つは、今のアンティグオ地区にあたる農業飛び領地でした。ウルメアの川は整備されておらず、またビーチへの道もまだできていませんでした。現在のドノステリア-サンセバスチャンの他の地区は、砂地と沼地が広がっているだけにすぎなかったのです。

始めは木造、後に石造りのなった家がひしめく城壁に囲まれた地域は、災害を受けやすいところでした。13世紀からの12もの火事は、その度に町を焼け尽くしてしまいました。中でも劇的だったのは1813年8月31日の火事でした。要塞だったドノステリア-サンセバスチャンは、それまで何度もフランス軍隊に占拠されていましたが、英国-ポルトガル同盟軍に包囲された時、ナポレオン軍に占拠されていました。そして町を開放することになる行動は、逆にすさまじい略奪と焼き打ちに変わり、ドノステリア-サンセバスチャンは、二つの教区教会と一つの家並みを残してすっかり灰燼に帰してしまいました。その後、火災から免れたその通りは、8月31日通りとして知られることになります。



19世紀の間、再建されたドノスティアは、明らかな衰退に直面していましたが、それは皮膚病の治療にカンタブリア海の水を勧めたイサベル女王2世の担当医のおかげで、幸運にも歯止めがかかることとなります。つまりイサベル女王2世は、カンタブリア海にある街のうちサンセバスチャンを選んだのです。

追放になるまでの20年間、女王は、街での避暑の習慣を欠かしませんでした。そしてドノスティアでの避暑は、宮廷の習慣として広がっていきます。

1863年、イサベル女王2世は、旧市街にある強制飛び領地の拡張の妨げになっている城壁の取り壊しを許可します。その結果、サンセバスチャンは、乾燥した塩沢の上に、アントニオ・コルタサールの設計による規則的に並ぶ通りと気品のある建築の新開発地区とともに拡張されていきます。この拡張に、街の象徴ともなっているグランカジノ、現在の市庁舎などの建築が加えられ、完成していきました。マリアクリスティーナ摂政女王も引き継いだギャンブルと宮廷の避暑の習慣は、“ベルエポック(よき時代)”を生み出します。それは、19世紀末から20世紀の20年代まで、ドノスティア-サンセバスチャンがヨーロッパの貴族社会が集う中心地だった時代でした。ギャンブルの禁止と内戦は、その黄金の時代に終止符を打ちます。

文化の県都

今日のギブスコア県都は、人口約18万人の街です。経済の中心

地であるビルバオ、行政都市であるエウスカディ首都ビルトリアに対して、ドノスティア-サンセバスチャンは、三つの都市の中でもっとも観光と文化に強い街とってよいでしょう。

ここでの観光は、他の地域とは違って混み合っていません。ここでは観光客は、地元民とまったく同じことを楽しみます。それは、遊歩道を散歩する、浜辺で泳ぐ、賑やかなバル(バー)街をまわることです。贅沢をしたい人には、まず世界的に有名なレストランでの食事をして、新しいカジノやスピエタの競馬場で遊び、海水療法でリラックスするなど、さまざまな過ごし方があります。

また日常的な贅沢ともいえるのは、ドノスティア-サンセバスチャンでは、常に文化的な催しが開かれていることです。これはこの規模の街には珍しいことですが、すでにドノスティアでは伝統になっています。国際映画祭、キンセナ・ムシカル(音楽の15日間)、ジャズフェスティバルといった代表的なイベントの他に、夏の講習会、ファンタスティック・ホラー映画フェスティバル、マイアツァ・ダンツァ、広告フェスティバル、演劇フェア、さらに地区ごとのカルチャーセンターでも小規模な催しが行われています。

1912年以降文化行事の大半は、ビクトリア・エウヘニア劇場で開催されてきましたが、現在はその主役の座を、クルサールに譲っています。クルサールは、ラファエル・モネオ設計の二つから成るガラス張りキューブ形の建物で、一方はウルメア川沿いに、もう一方は、スリオラの浜に面して堂々と立っています。



サグラドコロソン(聖心)の像は、ウルグル山から、ドノスティア・サンセバスチャン街すべてを見守っています。

そしてカンタブリア海に面したこの建物の舞台が、現在、国際映画祭とキンセナ・ムシカルという二つの大きなイベントの中心となっています。さらにクルサールは、開催地をドノスティアに選んだ数多くの会議の場としても機能しており、それぞれにふさわしいサービスを提供しています。

クルサール、イルンベの闘牛場とレジャーセンター、楽しくてためになるミラモンのクチャ科学ホール、そしてパセオヌエボ(新散歩道)にあるホルヘ・オテイサの彫刻作品“空(から)の建築”などは、何年もドノスティア・サンセバスチャンを訪れていなかった人たちにとっては、新しい街の顔といえるでしょう。

散歩しながら

街の心臓部は、旧市街です。ここは、店、バル、レストランが並び、あらゆる種類、年代、スタイルの、地元民のみならず訪問者が行き交うところです。ここでは、誰もがチキテオ(パー巡り)とピンチョ(一口のつまみ)を楽しみます。この旧市街には、荘厳な16世紀ゴシック建築のサンピセンテ教会、現在修復中の旧ドミニコ会修道院サンテルモ博物館、そしてサンタマリア・デル・コロ聖堂の三つの歴史的な建造物があります。他の見所として、改装された市場のラブレチャとコンスティトゥション広場をあげることができます。

港では漁船とクルーザーが行き来します。城壁に沿って歩いていくと、典型的なレストランが並ぶ先に、水族館が見えてきます。

水族館の見どころは、ガラス張りパノラマトンネルで、そこには驚きにあふれた海中の様子が広がっています。

散歩は、地元の人々の楽しみの一つですが、外からの訪問者にとっても街を知る最良の方法です。広がった展望をお望みなら、ドノスティアの海岸をすべて歩いてまわれる海岸の長い散歩はいかがですか。道を横切ることもなく、一つの道が7キロ以上続いています。この散歩道の中でも親しまれてきた区間は、ヌエボ、ラコンチャの二つの散歩道です。ヌエボ散歩道はウルグル山をまわるもので、9月、10月の大きな波しぶきが岸壁を超え、歩道に寄せるさまは非常にダイナミックです。タマリンドの木(この珍しい木の本当の名前は、ギョリュウ)とクラシックな模様の白い欄干は、コンチャの散歩道の象徴です。この道は、公園を抜け、オングレタ散歩道に続き、エドゥアルド・チリーダの作品ペイネ・デル・ビエント(風のすき櫛)で終わります。

両散歩道の間には、美しい庭園の中にミラマール宮殿が見えます。この宮殿は、マリアクリスティーナ女王によって建てられたイギリス様式の建物です。アイエテ宮殿とクリスティー・ナエネアも緑豊かなところ です。

またウルメア川付近も散歩道としてふさわしいところです。中心街の歩行者天国、さまざまな店が並ぶ通り、ギブスコア広場、また旧市街と洗練された国際性豊かな新しい中心地を結ぶボレバード通り。違った趣の散歩をお楽しみください。

歩いて...

ドノスティア - サンセバスチャン 古くて、しかも現代的

山に囲まれた砂浜、たくさんの散歩道、威厳ある建物が並ぶ旧市街。昔王室が、ドノスティア - サンセバスチャンを避暑地を選んだのもうなずけます。

まずは、ブエンパストール大聖堂。高さ75メートルのネオゴシック様式の塔が目立ちます。その後ろには、最新の本の情報を備え展示会も行われるコルド・ミチェレナ文化センターがあります。

中心に円形噴水があるビルバオ広場を横切ると、ウルメア川に出ます。そこには、おびただしい装飾が目を引くマリアクリスティーナ橋がかかっています。その小廟はパリ風にできています。

橋を渡って左へ行くと、フランス風邸宅と川の反射を見ながら歩くゆったりとした空間のフランシア散歩道があります。

ウルメア川のサンタカタリナ橋を渡って戻ると、リベルタット大通りに出ます。ここは、商業、銀行街です。

遊歩道のチュルカ通りへ曲がると、庭のあるおしゃれなギブスコア広場に着きます。ここには、ギブスコア県議会と緑に囲まれて音楽家ウサンディサガの銅像があります。

その近くには、オケンド庭園があります。

公園の両側には、19世紀の代表的な建築物マリアクリスティーナ・ホテルとビクトリア・エウヘニア劇場が見えます。

スリオラ橋の向こう側に、1万枚ものガラスで覆われた奇抜な建物クルサルホールが見えてきます。スリオラのビーチを望むクルサルは、建築家ラファエル・モネオの設計で、新しいコンサートホール、会議場として建設されました。

そこから新興地と旧市街をつなぐブオレバード大通りを進み、ナリカ通りに入ります。

柱廊のあるコンスティトゥシオン広場は、市庁舎の本部でした。現在は、タンボラダ(太鼓パレード)を含め、主な祭事の中心開催場になっています。

街でもっとも古い聖堂サンビセンテ教会から、

サンテルモ博物館へと向かいましょう。

この古い修道院は、バスク文化博物館です。セルトの大きな油絵画が目を引きま

す。1813年の火災で唯一生き延びた8月31日通りを行くと、街の守護聖女であるサンタマリア・デル・コロバシリカ教会が見えてきます。

趣のある港の散歩道には、新しくなった水族館と船舶博物館があります。



失念 たくさんある海岸の散歩道に夢中になり訪問者はウルメア川の存在を忘れがちですが、フランス様式の散歩道も豪華な橋も、地元民に愛されています。



闘牛 コンスティトゥシオン広場は、昔闘牛場として機能していました。ボックス席として使われたバルコニーは、番号とともに今も残っています。



崇拜 この街の守護聖女コロと守護聖人サンセバスチャン。射殺されたその聖人は、教会の玄関の彫刻と祭壇の油絵の中に生きています。



主人公 3,000匹の魚が泳ぐ水族館の中でも、やはり注目を集めるのは、鯨の骨組と泳ぎ回る2匹の鯨たちです。



イギリス風 フランス化されたドノスティアの街に、マリアクリスティーナ女王は、コテージが特徴的なイギリス風ミラマール宮殿を建設しました。



美 ベーニャ・ガンチェギによる市内散歩道、チリーダの3つの鉄彫刻、波打つその風景は、ベーニャ・デル・ピエントを魔法の空間に変えます。



港を引き返してコンチャ湾に沿って行くと、現在市庁舎内にあるアルデルディ・エデル庭園に着きます。この市庁舎は、1887年から賭事が禁止になるまで、ヨーロッパ中の貴族を魅了していたグランカジノでした。

時間があるときには、のんびりラコンチャ散歩道をイギリス風ミラマール宮殿まで行くのもいいでしょう。さらに歩いて行くと、オングレタにある鉄彫刻ベイネ・デル・ピエント(風のすき櫛)を見ることが出来ます。